



Title	11. 「びあのわ」参加報告：諸ピア団体の活動と問題への対策
Author(s)	鎗水, 孝太
Citation	北海道大学ピア・サポート活動報告書（平成23年度版）p.131-135
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/49509
Type	report
Note	第3部: ピア・サポート活動の考察
File Information	12.yarimizu.pdf



[Instructions for use](#)

11. 「ぴあのわ」参加報告

—諸ピア団体の活動と問題への対策

鎗水孝太¹

本章は、2012年1月7日名古屋工業大学において開催された第5回ぴあのわへの参加報告として学内で開催した「ぴあのわ」報告会での報告を文書としてまとめたものである。今回のぴあのわには、我々北海道大学ピア・サポートのほかに、北大留学生サポートデスク(以下北大留学生SD、北見工業大学、長岡技術科学大学、名古屋大学、名古屋工業大学、日本福祉大学、三重大学、追手門学院大学、広島大学のピア・サポートの9大学10団体が参加し、各々その活動についての報告と、広島大学大学院教育学研究科藤原美聡氏の講演²、愛媛大学SCV(スチューデント・キャンパス・ボランティア)による講演等が行われた。本報告では特に今後の北大ピアへの還元を目的として各大学の報告をまとめるものである。

しかしながら参加10団体についても、それぞれその活動内容、目的等は多岐にわたっており、まずはこれら各団体をその性格から分類することが必要であるように思われた。ここでは筆者の主観的印象から、その活動内容とその対象から分類できないかと考え作成したのが以下の図である(図1)。

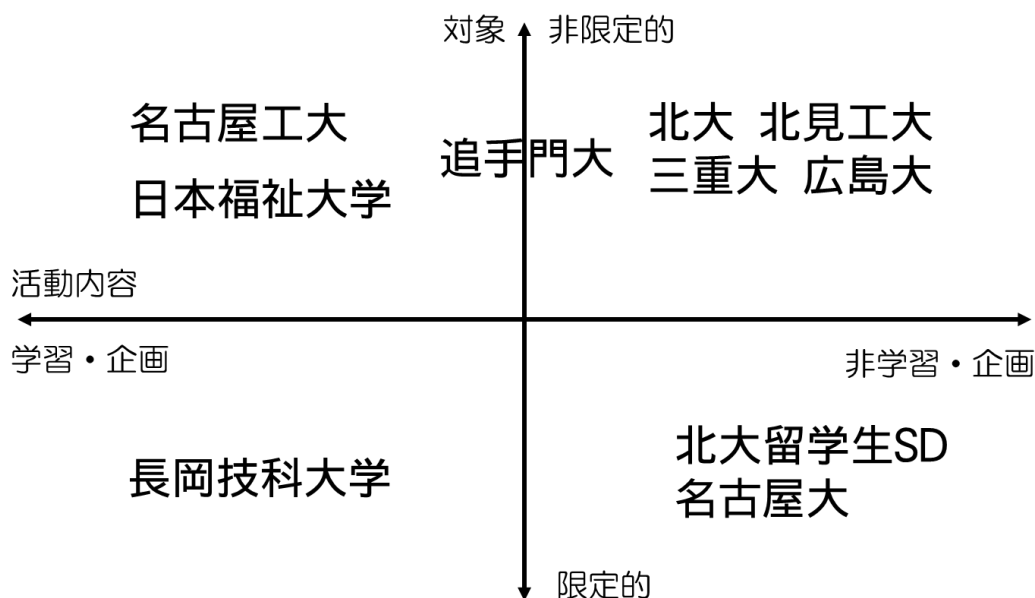


図1 参加ピア・サポート団体の分類

ここでは、縦軸を対象が限定的か非限定的かとして、横軸を活動内容が学習サポートやイベント・企画などが大きいかそうでないかとして、参加団体を4つに分類した。ここで

¹ 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 修士課程

² 本報告書にも特別寄稿をいただいている(第10章参照)。

の分類も発表を聴いた上での筆者の主観的なものであるが、大きく外れてはいないように感じている。その上で北海道大学ピア・サポートは、北見工大、三重大、広島大等の団体と形態は近く、以下の報告においても、これらの大学が多く登場することになる。

では、以下では北大ピアやその他の団体などで問題等になっていると思われる(1)新規サポーター募集、(2)組織・システム、(3)広報、(4)利用者とのかかわり、(5)研修・勉強会、(6)企画・イベント、(7)学内連携、(8)学外連携の 8 つの論点から各団体の活動についてみてきたい。

(1)新規サポーター募集

これは特に現在の北海道大学ピア・サポートに大きくのしかかっている問題の一つである。本報告書第 1 章の岡本の報告にまとめられているように、これまで大きく人脈によって人員確保をしてきたが、今年度 5 名の卒業・修了などによって来年度からも活動が続ける現メンバーは 5 名となる予定である。そのため公募による人員確保が今まきに行われているところである。

同様に人脈及び公募によってサポーターを補充しているのが、名古屋工業大学である。名古屋工業大学においては、常時公募によりサポーターを募集しており、なるべく全学科からのサポーター確保が図られていることが発表されている。

これに対し、サポーター養成を大学の正課授業に組み込み、非常にシステマティックにサポーターを確保しているのが広島大学及び三重大大学である。特に三重大大学では「キャリア・ピアサポーター資格教育プログラム」としてピア・サポーターの資格化とその教育のプログラム化がなされている。

(2) 組織・システム

現在の北海道大学ピア・サポートにおいては、特にその組織を部局等に分けることなく、各イベント・企画等毎にそれぞれ責任者を決めた上で全員で活動を行っている。

この部門・部局制を取り入れているのが、北見工業大学、名古屋大学、広島大学である。それぞれ企画・広報・総務、広報・運営・報告書・HP・会計、総務・広報・研修などの部門・部局を設けそれぞれ活動を行っている。

北海道大学ピア・サポートにおいても来年度より多くの新規サポーターが加入する中で、ピア・サポート活動への円滑な参入、意識の保持のために、ある程度の部門・部局制を導入するか検討中である。一方で厳格な部門・部局制の導入は活動の広がりを失うことにならないかなどの導入に慎重な意見も出ており、いまだ議論中の問題である。

(3) 広報

ピア・サポートの活動(開室時間などのピア・サポートそのものや企画・イベント)の広報については、北海道大学ピア・サポートでは、ポスターなどによる広報が主である。これはその他諸団体においてもおおむね同様であるようである。

また、北海道大学ピア・サポートでは広報ビデオとして「苦楽戦隊ピアレンジャー」を製作し、YouTube 上において全世界に公開している³。この他インターネットによる情報発信について言及したのが、北見工業大学と三重大学である。それぞれ Blog、Twitter を利用した情報発信を目指しており、ICT を用いた広報活動も今後ピア活動の中で大きくなっていくものと思われる。

(4) 利用者とのかかわり

ピア・サポート室での利用者とのかかわりは、北海道大学ピア・サポートでは通常の相談業務とその他入室者との会話がほとんどである。これに対して様々なメディアによるピア・サポーターへのアクセスとコミュニケーションによって非常に面白い活動を行っているのが、名古屋大学、追手門学院大学である。

名古屋大学では、「つぶやきノート」・「ピアサポスト」といった筆記メディアによって、気軽なサポーター、またその他の人々とのコミュニケーションを可能にしている。追手門学院大学においても同様に「ちょこっと相談 BOX」という投書システムによって利用者との交流を図っている。両者とも「ユーモア」ということをこれらの活動の中心に考えており、気軽なコミュニケーション、気軽な相談の大きなポイントになっていると思われる。

このピア・サポートへの「気軽さ」は、上記広報ビデオ「ピア・レンジャー」製作の大きな目的の一つであった。ピア・サポート活動を考える上で「気軽さ」は非常に重要な要素である。

(5) 研修・勉強会

これは、ピア・サポーターとしての加入時とその後のメンバーによる定期・不定期の勉強会等の2つの事柄についてである。

前者に関しては、現在のところ北海道大学ピア・サポートでは、加入時に行われる渡邊誠先生による傾聴技法講習が唯一とあってよい。もちろんそれは、これまでの人員補充が人脈に基づくものであり、ピア・サポートの基本的な精神や活動があらかじめ了解している上での加入であった、ということが基礎にある。また後者に関しても、月に一回の全体会議で互いに話し合う場は存在するものの、研修・勉強会という形はとられていない。

これに対し、(1)新規サポーター募集に挙げたように、その加入がシステマティックで、加入時研修等も厚くなされているのが、広島大学並びに三重大学である。すなわち正課授業が研修の第一歩として位置付けられ、その後数回の合宿・セミナー等を通してサポーター育成がなされている。また、通常活動期の研修・勉強会や合宿等についても、北見工業大学、名古屋大学、日本福祉大学などの多くの団体で、活動が行われていることが発表されている。

公募によるサポーター募集を始めた我々北海道大学ピア・サポートについても、これは喫緊の課題である。導入の是非、またその内容など改めて議論が求められる時期に来てい

³ <http://www.youtube.com/watch?v=8Xz8LQ6FROM>

る。

(6)企画・イベント

北海道大学ピア・サポートのなかでも、通常の相談業務と並んで、各種のイベントは、大きな活動の柱の一つである。詳細については、本報告書の各イベントごとの報告をお読みいただきたいが、本活、ピアカフェ等を中心として、キャリア教育支援室や大学図書館などとも連携しながら、随時イベントを開催している。

この企画・イベント等が特に盛んな団体が、日本福祉大学や大手門学院大学である。特に大手門学院大学は、その学習支援室としての性格を主とした簿記学習支援講座などの学習支援企画のほかにも、戦国座談会・鉄道座談会・蹴鞠の会などの非常に興味深い学生企画を行っており、注目される。

しかしながらやはりどの団体においても、そのイベントの参加者数などが問題となっており、(3)広報などとも絡んで、より学生に身近な企画等の在り方が求められている。

(7)学内連携

もちろんこれは、「インターカー」であることを第一の目的として設立された北海道大学ピア・サポートでは当たり前のことである。その上で、これまでつながり創出のテーマのもと、学内各機関への挨拶と電話帳等の作成などの活動を行ってきた。しかしながら、今年度からの総合入試の導入によりより不安定な状況におかれた一年生に対応するためにも、これまで以上に、各組織・機関や各学部・各研究室・各教授など、より広範な連携が、我々北海道大学ピア・サポートに求められている。

ここで参考としたいのが名古屋工業大学の事例である。名古屋工業大学では各分野一人ずつ先生を「学習相談員」として、その連携を深めている。一方で、もともとその学習相談の対応の場として設けられたピア・サポート内での解決への期待もあり、連携の不足なども生じているという。

北海道大学ピア・サポートの活動においても、なかなか気軽に教授や学内機関等にはアクセスできない学生のために、という面はもちろんある。ただ一方で、そこで繋げられる教授や学内機関等にも、ピア・サポートを通してそこにつなぐことによって、学生と機関とがより円滑なコミュニケーションが図れたりするような形ができないかを考えなければならぬ。

(8)学外交流

ここでの学外連携はぴあのわのような各大学のピア・サポート団体の相互連携ではなく、地域社会や大学外の一般社会とのかかわりの問題である。

これまで北海道大学ピア・サポートでは、観光地にもなっている北海道大学の中にあるという関係からか、学外からの来室者等も少なからずあり、それぞれ対応してきた。しかしながらこちらが積極的に外に飛び出すような活動は、全く行っていないし、考えられて

も来なかったと言ってよい。

これに対して、非常に活発に地域・学外団体との交流を図っているのが、北見工業大学である。特に北見工業大学では地域の小中高校との交流が盛んであり、小中学校の子ども会議への参加や高校への訪問などが報告されている。また、「オホーツクピアサポート研究会」という、主に小中学生のピア・サポート活動を中心としたピア・サポートの実践・研究会に参加しているという。この他、前述の追手門学院大学の「蹴鞠の会」のように地域とともに活動するピア・サポート団体も数多くあるようである。

もちろんこれらの活動は、大学の規模や立地などといった要素が大きくからんでいると思われる。札幌の中心の広大な敷地の中で活動する我々北海道大学ピア・サポートにも、そのような活動の余地があるのか、改めて考えてみる必要がある。

以上、8つの論点について、ぴあのおわ参加諸団体の活動と我々北海道大学ピア・サポートの活動についてみてきた。

ぴあのおわに参加した印象として、我々北海道大学ピア・サポートは比較的うまく活動を継続してきたような印象を受けた。もちろん自讃的になってはならないが、自己による評価としては、設立から2年ほど、うまくやってきているといえるのではないと思われる。

一方で、それはこれまでのメンバー個人の資質を抛り所としてきたところが、多分にあるのではないと思われる。(1)新規サポーター募集に述べたように、これまで人脈の中で、北海道大学ピア・サポートの目的・意義に共鳴した人々によって、これまで北海道大学ピア・サポートは担われてきた。もちろん今回初めて行われた公募によって集まったメンバーも、それを理解し、志を持って加入してくれるものと信じている。

しかしながらやはり、我々北海道大学ピア・サポートにとって、この三月の設立メンバー全員の卒業・修了と初めての公募による新規メンバー募集は、大きな節目を迎えたと言ってよい。今後の活動の継続のためにも今回挙げた論点について、改めて議論するとともに、取り入れるもの・取り入れないものを取捨選択しながら、北海道大学ピア・サポートの形態にあったかたちでの導入を図っていくことが求められている。